

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 28 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520282

研究課題名(和文) エリザベス朝演劇文化の誕生に作用した大学才人と英国国教会の接触に関する動態的研究

研究課題名(英文) A Study of the Foundation of Elizabethan Drama with Special Reference to Dynamic Negotiations between the University Wits and the Church of England

研究代表者

佐野 隆弥 (SAN0, Takaya)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：90196296

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円、(間接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：大学才人の劇作家たちが1580年代から1590年代にかけて生成・発展させた演劇文化および散文文化の状況を、歴史的・政治的・宗教的コンテキストにおいて調査分析し、エリザベス朝後期における演劇文化ならびに散文文化と英国国教会との関係を、取り分け動態的諸相に注目しながら実証的に記述した。今回のプロジェクトでは特に、大学才人の中でも英国国教会体制との繋がりが緊密だと考えられる3人の劇作家、ロバート・グリーン、クリストファー・マロウ、ジョン・リリーに焦点を絞り、彼等の劇作の有りように影響を与えた政治・宗教的側面の特質とその限界を具体的に明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study further explores the influences the Church of England exerted on Elizabethan drama from the 1580s to the 1590s. It also investigates how the University Wits (in particular, Robert Greene, Christopher Marlowe, and John Lyly who all seem to have many dynamic connections and contacts with the Church of England) generated and developed Elizabethan drama engaged in serious negotiations with the Church of England through analyses of their dramatic texts and prose works. This study has been conducted as part of a broader research project of mine which seeks to describe a wide variety of cultural activities of the University Wits.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：英国国教会 カトリック 宗教戦争 聖書劇 Robert Greene Christopher Marlowe John Lyly エリザベス朝散文

## 1. 研究開始当初の背景

エリザベス朝演劇文化の立ち上げや構築に関する研究は、古くから行われており、特に20世紀のE. K. ChambersやG. Wickham, G. E. Bentleyなどの先学たちの研究は優れたもので、その成果の多くは今日でも妥当なものとして受け入れられている。研究代表者もこれまで、平成20～22年度の基盤研究(C)のプロジェクトを中心に、エリザベス朝演劇文化の起業について研究を続けてきた。本研究の課題である、エリザベス朝期における演劇文化の起業に関する動態的研究は、従前からの研究の分析対象時期の前半期に特化した、発展的研究である。

1580年代から90年代にかけてのイングランドでは、英国国教会の体制強化と国家意識の高揚を通して、自国文化創造の模索がなされていた。こうした機運の中で登場したのが、大学才人たちであり、彼等は、プロテスタント・カトリズム両宗派のせめぎ合いを常に念頭に置きながら活動し、演劇や散文作品の水準を高めることに大いに貢献したが、文化・演劇産出と宗教の関係については不明の点が多く残っており、エリザベス朝演劇文化研究者の理解も十分とは言えない。本研究は、先行研究を包括的に再検討した上で、大学才人の前半期を代表するRobert Greene, Christopher Marlowe, John Lylyの3名を軸に、この21世紀において適切なエリザベス朝文化史の構築を試み、実証的に構築されたエリザベス朝文化史を通しての演劇文化と宗教の動態解明を行った。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、エリザベス朝期における演劇文化の起業に関する動態の様相の解明である。取り分け大学才人と英国国教会が与えた影響に注目することで、1580年代・90年代イングランドにおける演劇文化が立ち上げられる様を実証的に再構成・記述しながら、演劇文化の起業に大きく与った大学才人と呼ばれる劇作家や文筆家の政治・宗教的位置と演劇・文筆活動の関係を探り、併せて、Greene, Marlowe, Lylyの戯曲と散文作品を検証し、テキストの特質を明らかにすることを目指した。

## 3. 研究の方法

(1) エリザベス朝後期の宗教改革関連の状況を詳細に調査し、記述する。英国国教会関連資料、政府・枢密院資料、星室庁その他の歴史資料を精査し、この間の経緯を検証し、国教会体制の変遷を歴史的に跡付ける。その上で、宗教状況と演劇を中心とした文化状況の関係について調査する。そして上記の分析を踏まえて、Robert Greeneの業績取り分け、イングランド最後の聖書劇の一つと言われる*A Looking Glass for London and England*を検討する。演劇が聖書に取材することが不可能となっていたプロテスタ

ント的反演劇主義の流れの中で、それにもかかわらずGreeneはそれを実行した訳だが、この背景には英国国教会体制が内在させる新旧両宗派の中間的性質という問題があり、その亀裂が宗教的テンションの高まりの中で露見したものと考えられる。Greeneの他作品をも取り込んで解明を行う。

(2) Christopher Marloweは、その劇作を通して様々な近代的思想を演劇化した劇作家である。*Tamburlaine the Great*における地政学的政治思想や*The Jew of Malta*における功利的経済思想はよく知られているが、宗教的・政治的見地から考えた時、Marloweの最大の特徴は摂理主義に対する懐疑主義であり、人間の動機や主体に重きを置く、古代ローマの歴史家Cornelius Tacitusの歴史観への傾斜であった。Marloweのこうした歴史編纂へのスタンスは、フランスでの宗教戦争における因果関係を探求する*The Massacre at Paris*などに最もよく顕現しているが、この方面の研究はA. Kirkなどまだ緒に就いたばかりである。本研究では、知識人および宮廷政治に不満を抱く貴族等の間で急速に広まった懐疑主義を軸にして、Marloweを中心とした大学才人と政治家の関わりを調査し、そのことを通して、Marloweが試みた政治思想の演劇化と、その同時代文化への影響を解明する。

(3) John Lylyは、1580年代の初期より、オックスフォード伯に仕えていた関係で聖ポール寺院少年劇団と関わり、その座付き作者として劇団の経営に当たっていた。少年劇団は元来宮廷と結び付きの強い存在であったが、そのことは逆に、少年劇団による宮廷上演が、宮廷の政治的・宗教的環境の影響を受けやすいことを意味している。Lylyが、少年劇団の責任者として監督を務めていた頃、Lylyの主人オックスフォード伯は、女王の不興を買い、宮廷への参内も禁じられていたとされる。Lylyによる*Campaspe*などの喜劇の作劇は、オックスフォード伯の謹慎がちょうど解けた時期と重なるが、これらの戯曲には、女王との微妙な間合いをあれこれと勘案するLylyの姿が見え隠れすると考えられる。本研究は、演劇創造の現場と宮廷政治が接触し、きしみ合う軋轢の中で、Lylyの振る舞いを検証しながら、Lylyの喜劇創作が同時代文化に及ぼした効果と影響を解明する。

## 4. 研究成果

2011年度～2013年度の3年間に4件の原著論文、1件の書評を刊行し、5件の口頭発表を行った。研究成果の概要を以下に述べる。

### (1) 原著論文(すべて単著)

「エリザベス朝演劇における社会的弱者としての病人 感染症罹患者の階層化と*Timon of Athens*への一つの視座」(2014年)

本論文は、Shakespeareの悲劇*Timon of*

Athens を感染症罹患者という社会的弱者にまつわる表象を軸に分析した論考である。

議論の出発点として、初期近代イングランドにおけるペスト罹患者の様々な表象を検証し、彼等が社会的弱者の位置に定位されていることを確認した。その上で議論の参照枠を拡大するために、治癒神と難病治療の歴史をたどり、さらに難治性疾患と皮膚病変が医療の発達過程で分かちがたく捉えられてきた状況を検証することを通して、医療行為と難病に内在する階層化のベクトルの存在を指摘した。

次に、上記の知見をもとに、初期近代演劇に分析の対象を限定し、該当時期の演劇には、ペスト患者やその遺族を直接的な形で舞台上に上げた劇作家は1人もいなかったことを確認した後、贈与や金融といった経済的コンテクストの検証に偏りがちな *Timon of Athens* には、実のところ、皮膚疾患をとまなう感染症の罹患などの疫学的見地から照射される新たな意味の地層が存在することを明らかにした。

「銃・疫病・資本 Marlowe 作品現存原稿から照射した *The Massacre at Paris*」(2013年)

本論文は、サン＝バルテルミの虐殺というフランス宗教戦争上の一エピソードに取材した Marlowe の悲劇 *The Massacre at Paris* に残されたマニユスクリプトの断片を切り口に、戯曲本体上での構成的意義を議論した。この断片には、マスケット銃を使用する希少なアクションが存在するが、これはサン＝バルテルミの虐殺の引き金となった提督暗殺未遂事件と共鳴現象を引き起こす効果を有するものであり、観客の意識に新旧両宗派の対立を改めて喚起するものであることを指摘した。

さらに、本劇にはプロテスタントがペストなど疫病と二重写しにされ他者化される台詞が存在するが、ここにも新旧両宗派の対立を意識化させる仕掛けがあることを確認した後、サン＝バルテルミの虐殺当時のフランスがプロテスタント・カトリック両勢力間の狭間に位置付けられた地政学的要衝であったことを検証した。

そして最後に再び議論の出発点であったマニユスクリプトの断片に戻り、そこで多用される土地資本への執拗な言及が、*The Massacre at Paris* 後半部の受容を大きく規定する作用を有することを明らかにした。

「エリザベス朝散文とその後(1) ペスト表象を中心に」(2012年)

本論文は、エリザベス朝散文が17世紀を経由して小説というジャンルの勃興へと至る時、そこにはどのような現象が生起しているのか、という問題意識のもとに、写実性と教訓性という二つの要素を軸に検証した論考である。

議論の一貫性を保証するために、分析対象をペストに関するルポルタージュに限定した上で、分析の出発点として、大学才人の一人 Thomas Lodge の *Treatise of the Plague* と Thomas Dekker の *The Wonderful Year 1603* を取り上げ、それらを Daniel Defoe のペストに関するルポルタージュ *A Journal of the Plague Year* および *Due Preparations for the Plague, as well for Soul as Body* と比較させることで、両者の間に横たわる1世紀間に生じた規範性と写実性の相剋の実態を探った。

医師でもあった Lodge の *Treatise of the Plague* では、古代ギリシア・ローマ以来のガレノスの体液病理説と神への祈願を中心とする伝統的キリスト教への帰依が規範的な力として作用していたが、よりジャーナリスティックな Dekker の場合、彼の作品を統御する力は、レトリックを駆使することで生々しい現実を読者に報告しようとするルポルタージュへの指向へと変化している。両作品より100年以上後に書かれた Defoe の二作品では、科学的知見の進展を反映した記述が増加していることは当然としても、Defoe 個人の宗教的傾向を映してのことであるが、神の摂理への執拗な言及が明示するように、宗教的言説が規範として機能していることを明らかにした。

「聖書劇の可能性 *A Looking Glass for London and England* の場合」(2012年)

本論文は、Thomas Lodge と Robert Greene の共作である *A Looking Glass for London and England* を取り上げ、聖書劇の創作上演が困難であった時期に、何故本劇の創作が可能であったのかを、同時期の聖書劇である George Peele の *David and Bethsabe* の分析とも関連させながら検証した論考である。

*A Looking Glass for London and England* の場合、本劇の構造と材源そして創作の時宜性が、安全装置として複合的に機能していると想定することが妥当であると考えられ、その根拠として以下の三つの項目を明らかにした。(1) 戯曲全体が「鏡(鑑)文学」という枠組みの下に位置付けられているため、その内部で語られ表象される悪徳や罪科などが包含されていたとしても、反面教師的役割のもと許容されやすい。(2) 物語の時間的スキームが、厳密な特定が困難な古代の近東に設定されているため、そうした遠隔化が戯曲内の記述を遠景化する。(3) 無敵艦隊来襲による反カトリック感情の高揚を一種の隠れ蓑として利用した。

(2) 書評(単著)

Kirk Melnikoff & Edward Gieskes, eds. *Writing Robert Greene: Essays on England's First Notorious Professional Writer* (Ashgate, 2008) (2013年)

“Re-imagining Robert Greene” と題された序論の中で、共編者 Melnikoff と Gieskes は、本論集の目的を次のように述べている

Greene の複雑な社会的立ち位置は、「三文文士」という評判によって非常に曇らされてきたが、Greene は「(専門職)職業的」作家であり、自らが文化的・市場的に規定される存在だという意識を見せている。本論集は、こうした「職業的」見地から Greene の仕事を再概念化し、職業的生産者としての Greene が、作家仲間、観客、パトロン、雇い主らとの広範な社会的空間と関わった様々な方法を追跡する。本論集は、作家としての Greene の実践を再考し、1580-90 年代前半における彼の様々な貢献を再評価する：(1) イングランド最初の職業作家である Greene は、初期近代の職業的書き手の代表的人物として認識されるべきである；(2) Greene の多面的な文学の場との関わり合いは、作家や文学の洗練の指標である。

本論集は全 10 章で構成され、9 つのモノグラフに加えて最終章が参考文献の形で収められている。各章はいずれも上述の共通認識の元に記述されているが、それぞれに特徴的な議論を展開しているため、いくつかの章を簡潔に紹介しておきたい。第 3 章(Edward Gieskes)は、異なった種類の劇作術を併置させる *James IV* が劇作という文化生産の場における演劇的競合を主題としていて、このこと自体が Greene のプロフェッショナルリズムの印であると論じる。第 5 章(Ronald A. Tumelson II)は、作者の制御権が存在しなかった初期近代イングランドの出版流通の市場で、Greene がいかに作者の地位向上に努め成果を上げたかを、*Groatsworth of Wit* を中心に論じている。第 6 章(Steve Mentz)も *Groatsworth* をめぐる議論であり、この作品が Chettle とのコラボレーションである点を出発点に、*Groatsworth* の作者としての「グリーン」が公的なペルソナであると同時に認識できる個人でもあったことを主張する。第 7 章(Lori Humphrey Newcomb)では、*The Repentance of Robert Greene* が議論の焦点となる。イングランドの宗教改革期の印刷文化の中で商業と信仰は分かちがたく結び付いており、Greene のパンフレットは 1590 年代の安価な信仰本の分野で革新的なものであったが、それは 16 世紀的な口頭による直接的な説教文化から 17 世紀的な視覚的信仰読書への移行を象徴しているからである。

本論集は、Shakespeare 偏重の研究状況へ一石を投じるものとして、また理論後の研究環境における理論的 Greene 研究としての価値を有する書である。同時代人によって、そして現代の我々によって書き込まれた多面的な文化的構築物 それが“Greene”である。

### (3) 口頭発表 (すべて単独)

「銃・疫病・資本 Marlowe 作品現存原

稿から照射した *The Massacre at Paris*」(2013 年 3 月)

原著論文「銃・疫病・資本 Marlowe 作品現存原稿から照射した *The Massacre at Paris*」(2013 年)に同じ。

「社会的弱者としての病人 感染症罹患者の階層化と *Timon of Athens* への一つの視座」(2012 年 12 月)

原著論文「エリザベス朝演劇における社会的弱者としての病人 感染症罹患者の階層化と *Timon of Athens* への一つの視座」(2014 年)に同じ。

「写実性と教訓性の干渉 description と prescription をめぐって」(2012 年 5 月)

原著論文「エリザベス朝散文とその後(1) ペスト表象を中心に」(2012 年)に同じ。

「聖書劇における旧約聖書の利用について」(2012 年 3 月)

原著論文「聖書劇の可能性 *A Looking Glass for London and England* の場合」(2012 年)に同じ。

「prescriptive から descriptive へ：初期近代散文の記述の変遷」(2011 年 9 月)

原著論文「エリザベス朝散文とその後(1) ペスト表象を中心に」(2012 年)の内容に加えて、17 世紀に生じた王立協会による英語改良運動や Margaret Cavendish の科学的エッセイである *Observations upon Experimental Philosophy* に観察される分析的記述法をも議論に取り込み、英語という言葉がこの時期から実利的な記述へと向かった現象を検証した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

(1) 佐野隆弥、エリザベス朝演劇における社会的弱者としての病人 感染症罹患者の階層化と *Timon of Athens* への一つの視座、『*文藝言語研究 文藝篇*』(筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻) 査読有、第 65 巻、pp. 17-36、2014 年。

(2) 佐野隆弥、銃・疫病・資本 Marlowe 作品現存原稿から照射した *The Massacre at Paris*、『*文藝言語研究 文藝篇*』(筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻) 査読有、第 64 巻、pp. 65-83、2013 年。

(3) 佐野隆弥、エリザベス朝散文とその後(1) ペスト表象を中心に、『*文藝言語研究 文藝篇*』(筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻) 査読有、第 62 巻、pp. 43-59、2012 年。

(4) 佐野隆弥、聖書劇の可能性 *A Looking Glass for London and England* の場合、

*Seijo English Monographs* (成城大学大学院文学研究科) 査読無、第 43 巻、pp. 153-168、2012 年。

〔学会発表〕(計 5 件)

(1) 佐野隆弥、銃・疫病・資本 Marlowe 作品現存原稿から照射した *The Massacre at Paris*、第 11 回エリザベス朝研究会、2013 年 3 月 9 日、慶應義塾大学。

(2) 佐野隆弥、社会的弱者としての病人感染症罹患者の階層化と *Timon of Athens* への一つの視座、「シェイクスピア劇における社会的弱者」第 5 回研究会、2012 年 12 月 15 日、学習院大学。

(3) 佐野隆弥、写実性と教訓性の干渉 description と prescription をめぐって、日本英文学会第 84 回大会、2012 年 5 月 26 日、専修大学。

(4) 佐野隆弥、聖書劇における旧約聖書の利用について、第 7 回エリザベス朝研究会、2012 年 3 月 17 日、慶應義塾大学。

(5) 佐野隆弥、prescriptive から descriptive へ：初期近代散文の記述の変遷、第 1 回エリザベス朝散文研究会、2011 年 9 月 6 日、東京女子大学。

〔その他〕(計 1 件)

<書評>

(1) 佐野隆弥、Kirk Melnikoff & Edward Gieskes, eds. *Writing Robert Greene: Essays on England's First Notorious Professional Writer* (Ashgate, 2008)、『英文學研究』(日本英文学会) 査読有、第 90 巻、pp. 40-45、2013 年。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

佐野 隆弥 (SANO, Takaya)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：90196296